

研究の沿革

相田 満

《一》研究の概要

〔一〕研究の意義

本研究のような研究対象に着目した研究は、国文学研究分野はもとより、他の分野でも体系的な研究どころか先行研究さえも皆無に近い状態であった。

その理由は、研究対象となる「標題」というものが、あまりにも身近で、かつ膨大にあるということに尽きよう。そのため、多量の標題を分析し、客観的に評価するための観点と手法、つまり切り口を持ち得なかつたのである。

たしかに、大量かつ多様な標題のすべてを通観することは困難である。

たとえば、作品の標題一つを採り上げても、その一つ一つには、深い意味と歴史が刻まれているものが少なくない。そのような標題を分析するためには、その標題の命名対象となつた成果物全体にも知悉しておくことが重要である。しかし、中には一つの標題のために数万言を費やしても語り尽くせぬものもあるため、研究の遂行に際しては、精密な分析と、大局を俯瞰するモデルを提示することの、双方のバランスにも配慮が求められるべきであろう。

また一方では、情報処理技術の進展によつて、分析可能となつた標本数は格段にその数を増してきており、客観的妥当性を帯びた分析を行うことが可能となつてきている。あとは、それらの素材を、どのような切り口で切り取つて腑分けするかということになるのだろうが、そのためには、いかに分かりやすく説明できるかということも重要な要件である。

そこで、本研究では、分析の主対象である「作品標題」と「目次標題」に対し

① 典型例の抽出

② 分析のための方法論の開発

③ 提示・説明を行うための手法の開発

④ 研究の可能性の模索とモデルの提示

という観点に基づく分析を試みる。

これは、上記状況をかながみて、「精密な分析」と「大局的なモデル提示」とのバランスを採るための「方法の試み」といってもよいだろう。しかし、そうした試みこそが、「標題」という、膨大かつ未開の素材に切り込むための重要な切り口の提示、すなわち、「知の枠組み」の提示であると考えるからである。

〔二〕研究立案の経緯

本研究は（和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究「研究代表者：相田 満」）という課題で平成十四年度（二〇〇二）から三年間、文部科学省萌芽研究の助成を受けたプロジェクトを骨子とする。

この助成を受けた研究に先立つこと四年前、すなわち平成十年度（一九九八）から十二年度（二〇〇〇）にかけて、その前身的プロジェクトとも言える（和漢古典分類語彙の階層化に関する基礎的研究）（相田 満「代表」・入口敦志・山田直子）を、同じ費目である「文部省科学研究費補助金萌芽的研究」の助成によつて取り組んだことがあった。この「標題文芸」にかかわる研究主題は、その

成果を継承しつつ、さらに発展的な視点によって取り組んだものである。

相田・入口・山田の三人はいずれも所属所の国文学研究資料館で、大規模データベースのコンテンツ作りにはたずさわるといふ、国文学という研究分野に携わる者にとっては希有な経験を共有する。

相田は『国文学年鑑』データの遡及データを累積させた『国文学論文目録データベース』のデータメンテナンスや、人物に関連する基礎情報を集成する『古典人名データベース』の構築に携わってきた。入口は毎年発刊される『国文学年鑑』の編集と『国文学論文目録データベース』の新規データの蓄積作業に、山田は『国書総目録』から発展した『古典籍総合目録データベース』の構築にたずさわってきた。

うんざりするほどの論文タイトル、書名、人名など、およそ非人間的なまでに大量な情報群との格闘を要求され続けた経験は、一方で、これらの情報を統御する手法への関心が喚起されるに至り、三人の共通の興味へと育っていった。そして、情報ソースから独立して、ものごとを上位層で統御する「分類」という行為自体を研究する動機を深めることとなったのである。

本研究の「標題文芸」という構想は、そうした「分類」という行為について、三年間の協議と研究を重ねる中で醸成されたものである。すなわち、

事物を名称と概念間の関係で統御するべく生み出され続けてきた「標題」(Title, Label)自体にも、「文芸」的現象が認められないだろうかという素朴な疑問が、「標題文芸」という術語を案出し、本研究を構想するに至った。

「名は体を表す」というわけではないが、「標題文芸」というコンセプトからは、さまざまに興味深い事象やテーマが湧いてくる。

この研究での分析対象の焦点は、一応日本の古典世界に置いた。その理由は、研究代表・分担・協力者の資質にも由来するが、それ以上に、

①「標題」の意匠に関する評価言説が多数取材可能なこと

②「標題」自体が独立した作品も通行していたこと

など、文化的継承性・表現技術・評価言説の諸点で、現代の作品以上に多様な典型的事例が期待されたからである。

しかし、実際の研究に際しては、

①古典文学における書名の標題

②目次標題

などのほか、

③標題自体を文芸作品として独立させた作品についての分析

④注釈における標題の意義についての分析

と、さまざまに考察を深めるべきことがらが浮き彫りになった。さらには「標題」というものの生成原理や価値を考察するために、比較対象となるべき、さまざまな脱領域的素材・研究の調査・分析も行い、情報学的手法と発想に基づく考察など、新しい観点によるさまざまな方向・素材についての分析も試みる必要も生じた。

そして研究が進むにしたがい、この研究主題に関心を持ってくれる人も次第に増えてきた。するとさらに多様な視点が提示されるようになってきた。

そうした状況を、視点の拡大・拡散と見る向きもあるかもしれない。しかし、本研究の主題は、言語文化の総体の枠組みの中で、系統的に位置づけられるべきであろう。その意味でも、本研究が活発な議論の呼び水となれば望外の幸せである。

《二》 研究報告会の記録

〔一〕 共同研究会

研究最終年度にあたる平成十六年度は四回の研究協議・報告会を開いた。

これで、三年間にわたる研究期間全体では十四回に及んだことになる。

研究協議・報告会で話し合われたことは、多岐にわたり、それぞれに有益な内容を多く含んではいたが、紙幅に限りもあるため、以下に題目のみをまとめて記す。

(一)平成十四年度(二〇〇二)

◎第一回

【開催日】平成十四年五月二十七日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【出席者】相田 満・入口 敦志・山田 直子

【研究発表・協議事項】

- ① 研究の進め方について(協議)
- ② 古典戯曲標題の奇数尊崇態度について(協議)
- ③ 媒体と標題の文字数について(協議)

◎第二回

【開催日】平成十四年六月十七日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【出席者】相田 満・入口 敦志・山田 直子

【研究発表・協議事項】

- ① 古典戯曲標題の奇数尊崇態度について「入口 敦志」
- ② 教育教材の開発について(協議)
- ③ 『類聚国史』の編纂意識について「相田 満」
- ④ 「随筆」という標題・ジャンルのターミノロジについて(協議)
- ⑤ 「注釈」のオントロジについて(協議)

◎第三回

【開催日】平成十四年七月十五日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【出席者】相田 満・入口 敦志・山田 直子

【研究発表・協議事項】

- ① 脚本・浄瑠璃・浮世草子の標題字数調査「入口 敦志」
- ② 教育教材の開発：学生の夏休み課題に標題文芸についての調査・分析を課したこと「相田 満」
- ③ ジャンルと文体との関係について(協議)

◎第四回

【開催日】平成十四年八月二十六日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【出席者】相田 満・江戸 英雄・山田 直子

【研究発表・協議事項】

- ① 和漢古典学のオントロジ「相田 満」
- ② 現在通行の古典注釈書の見出しの淵源について(協議)

◎第五回

【開催日】平成十四年九月二十七日(金)～二十九日(日)

【場所】福岡県久留米市および太宰府天満宮

【出席者】相田 満・安保 博史・長崎 健

【研究発表・協議事項】

- ① 研究の大綱と計画の進め方について(協議)
- ② 俳諧の書名意識について(協議)
- ③ 歌集の書名意識について(協議)

◎第六回

【開催日】平成十四年十月七日(月)

【場所】国文学研究資料館中会議室

【出席者】相田 満・安保 博史・入口 敦志・江戸 英雄・山田 直子・渡辺 信和

【研究発表・協議事項】

- ① 研究の大綱・計画の進め方・問題提議(協議)
- ② 脚本・浄瑠璃・浮世草子の標題の奇数時尊崇態度[入口 敦志]
- ③ 俳書における「標題」の意匠について[安保 博史]

◎第七回

【開催日】平成十四年十二月八日(日)～九日(月)

【場所】すわ湖苑(長野県諏訪市)

【出席者】相田 満・入口 敦志・安保 博史・江戸 英雄・長崎 健・渡辺 信和

【研究発表・協議事項】

- ① 中間報告書の作成について(協議)
- ② 現代における「標題」[相田 満]
- ③ 御伽草子の標題について[渡辺 信和]

(二)平成十五年度(二〇〇三)

◎第八回

【開催日】平成十五年七月二日(水)

【場所】国文学研究資料館大会議室

【出席者】相田・江戸・蔵中・後藤・佐伯・塩野・朽尾・長崎・中村・林・原・山田・渡辺

【研究発表・協議事項】

- ① ネットワーク統合型データベースによる東アジア資料の共有化に関する研究[原 正一郎]
- ② 「標題学」方法序説[相田 満]
- ③ 和漢古典学におけるオントロジ・モデルの構想[相田 満]

◎第九回

【開催日】平成十五年十一月十六日(日)

【場所】同朋大学知成館

【出席者】相田・坪・安保・江戸・蔵中・佐伯・谷本・朽尾・長崎・原・山田・渡辺

【研究発表・協議事項】

- ① ネットワーク統合型データベースによる東アジア資料の共有化について[原 正一郎]

② 『山海経』と猿について[朽尾 武]

③ 国立中央図書館台湾分館の和書調査報告―典拠の参照を中心に―

[山田 直子]

④ 仏典における和漢古典学のオントロジモデルの構築―唐・長安西明寺の

学僧の類聚的編纂物のもつ有機的關係から―[蔵中 しのぶ]

⑤ 『田舎』冠称型標題の一視点[安保 博史]

⑥ 近世初期の笑話本と標題文芸[入口 敦志]

⑦ 『本朝麗藻』の標題文芸[佐伯 雅子]

⑧ 標題文芸―『枕草子』をめぐって[坪 美奈子]

⑨ 同朋大学仏教文化研究所寺院襲藏物データベース―相田満・渡辺信和による共同作成―デモンストレーション[渡辺 信和]

◎第十回

【開催日】平成十六年二月十六日(月)

【場所】国文学研究資料館

【出席者】相田 満・坪 美奈子・安保 博史・入口 敦志・蔵中 しのぶ・佐伯 雅子・谷本 玲大・朽尾 武・中島 和歌子・根木 優・三田 明弘・山田 直子・渡辺 信和

【研究発表・協議事項】

- ① 「改題」の事例報告『西鶴諸国はなし』『本朝水滸伝』『安保 博史]
- ② 長安西明寺の類聚編纂書のオントロジとその受容―『諸経要集』述意縁・『法苑珠林』述意部と『三宝絵』上巻の構成―[蔵中 しのぶ]

③類聚性のある源氏物語の注釈書「後藤 幸良」

④『本朝麗藻』の分類「佐伯 雅子」

⑤『枕草子』初段と和漢の類書的首巻部類標題の関係について「中島和歌子」

(三)平成十六年度(二〇〇四)

◎第十一回

【開催日】平成十七年四月二十日(火)

【場所】国文学研究資料館

【出席者】相田 満・坪 美奈子・安保 博史・入口 敦志・蔵中しのぶ・佐伯 雅子・朽尾 武・根木 優・原 正一郎・山田 直子・渡辺 信和

【研究発表・協議事項】

①貞門俳人椋梨—雪の俳書標題の意匠—(安保 博史)

②仏典における和漢古典学のオントロジの継承—源順から源為憲へ—「蔵中しのぶ」

③『本朝麗藻』の詩題と分類—『江吏部集』・『本朝文粹』と比較して—「佐伯 雅子」

④オントロジデータ形成・分析支援プログラム(仮称)のデモンストレーション
「相田 満」

◎第十二回

【開催日】平成十六年八月五日(木)〜七日(土)

【場所】同朋大学知成館三階小講堂

【出席者】相田 満・坪 美奈子・安保 博史・入口 敦志・蔵中しのぶ(8/5〜7)・佐伯 雅子・谷本 玲大・朽尾 武・中島 和歌子(8/5〜6)・根木 優・原 正一郎・山田 直子・渡辺 信和

【研究発表・協議事項】

①『標題文芸』研究単行本発刊の流れについて「相田 満」

②標題文芸「書名を変えろ」と「書名の故実」「相田 満」

③引用書目から見る中世末から近世初期にかけての学問体系「入口 敦志」

④Znam 解析による標題の要素文字列抽出とその考察「谷本 玲大」

⑤近世後期の類書の源氏物語注釈書と辞書「後藤 幸良」

⑥「池亭記」と東西南北「佐伯 雅子」

⑦俳書標題における流行—「江戸」を冠した標題—「安保 博史」

⑧標題文芸—『枕草子』もの「型」類聚章段の人事(コト)と事物(モノ)と「坪 美奈子」

⑨標題文芸・標題学の構想「相田 満」

◎第十三回

【開催日】平成十六年十月二十八日(木)

【場所】国文学研究資料館

【出席者】相田 満・坪 美奈子・安保 博史・江戸 英雄・蔵中しのぶ・佐伯 雅子・谷本 玲大・長崎 健・根木 優・原 正一郎・山田 直子・渡辺 信和

【研究発表・協議事項】

①和漢古典学のオントロジの資源化のために

—「国書総目録」の分類について—「相田 満」

②平安後期漢詩集の分類と配列「佐伯 雅子」

③長安西明寺の類聚的編纂書のオントロジ

—「集神州三宝感通録」から「法苑珠林」へ—「蔵中しのぶ」

④『枕草子』類聚的章段の《標題》—伝本比較—「坪 美奈子」

⑤俳書標題における流行—「江戸」を冠した標題—「安保 博史」

⑥「標題・件名・検索語」「山田 直子」

◎第十四回

【開催日】平成十七年一月二十一日(金)

【場所】国文学研究資料館

【出席者】相田 満・坪 美奈子・蔵中しのぶ・佐伯 雅子・谷本 玲大・朽尾 武・中島 和歌子・根木 優・原 正一郎・山田 直子・渡辺 信和

【研究発表・協議事項】

- ① 『標題文芸・文芸としての標題の研究』出版助成申請の報告「相田 満」
- ② データ登録のフォーマットについて「相田 満」
- ③ 『本朝無題詩』の無題「佐伯 雅子」
- ④ 塔のオントロジ―長安西明寺の類聚編纂書をめぐって―「蔵中しのぶ」
- ⑤ 『枕草子』類聚的章段の〈標題〉―伝本比較―「坪 美奈子」
- ⑥ 『枕草子』は「型」類聚章段と和漢の類書の部類標題の関係について「中島 和歌子」
- ⑦ 歌集の部立・歌題の構造解析に於ける諸問題―『為家集』に見る―「谷本 玲大」
- ⑧ ネットワーク統合型データベースによる資料共有化に関する研究「原 正一郎」
- ⑨ 標題としての『法苑珠林』編目、部目及び感応縁説話題目「渡辺 信和」

【二】研究期間における研究報告

(一) 『標題文芸』〈巻〉・〈式〉・〈参〉(本誌)〈

本研究期間の成果の一部をまとめた過去二号分の研究報告誌には、『標題文芸』(巻)(式)(既刊)と本誌(参)号があるほか、研究報告会の内容(議事録)・協議事項内容をまとめた研究記録がある(これについては後日 Web 公開予定)。

① 『標題文芸(巻)』〔二〇〇三年三月〕 目次

- ◇ 研究の沿革(相田 満)(pp 1～5)
- ◇ 題名の文字数(入口 敦志)(pp 6～19)
- ◇ 俳書標題の意匠について

―『…草』型標題を中心に―(安保 博史)(pp 20～32)

- ◇ 御伽草子の標題について(ノート)(渡辺 信和)(pp 33～69)

- ◇ 「標題」のさまざま

―現代と脱領域的な視点から―(相田 満)(pp 70～81)

- ◆ 「標題」雑話◆ 「標題」の付く書名①(相田 満)(p 8)
- ◆ 「標題」雑話◆ 「標題」の付く書名②(相田 満)(p 32)
- ◆ 「標題」雑話◆ 「標題」の付く書名③(相田 満)(p 69)

② 『標題文芸(式)』〔二〇〇四年三月〕 目次

- ◇ 研究の沿革(相田 満)(pp 1～10)

- ◇ 仮名草子章題一覧稿(入口 敦志)(pp 11～38)

- ◇ 『秋かぜの記』という標題について(安保 博史)(pp 39～46)

- ◇ 目録標題ということ(1)(渡辺 信和)(pp 47～58)

- ◇ 「標題学」の視座(相田 満)(pp 59～71)

③ 『標題文芸(式)』〔二〇〇五年三月〕 (本誌)

(二) その他の研究成果物(論文・報告)

① 二〇〇二年度

- ◇ 『人物年表データベース』Ver 1「DVD-ROM」(相田 満・中村 康夫)
- (国文学研究資料館、二〇〇二・三・三一)

② 二〇〇三年度

◇相田満「標題学」方法序説(The introduction for the method of "Studying a Title")

『情報知識学会第十一回(二〇〇三年度)研究報告会講演論文集』情報知識学会、pp15〜20(六)、二〇〇三年五月二四日

◇相田満「古典的オントロジ資源の可能性―和漢古典学のオントロジ―」(The possibility of classic ontology resources-Ontology of the classic study about Japan and China-)

『情報処理学会論文集「人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもん)」(2003)』、vol.2003、No.21、情報処理学会、pp47〜54、二〇〇四年二月一七日

◇相田満「古典的オントロジ資源の形成―和漢古典学のオントロジ―」

『東洋学へのコンピュータ利用第一五回研究セミナー(京大大学術情報メディアセンター第七六回研究セミナー)』、京大大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター・京都大学学術情報メディアセンター、pp27〜29(一三)、二〇〇四年三月二六日

◇相田満「随心院蔵『百八字形』翻刻・解題」

『随心院聖教と寺院ネットワーク』第一集、随心院聖教調査研究会、pp5〜11(六)、二〇〇四年三月三一日

③二〇〇四年度

◇相田満「幼学書のひろがり―台湾故宫博物院蔵平安期古鈔本『蒙求』の意義と特質―」

『アジア遊学69・台湾からみる日本』相田満・江戸英雄：編、勉誠出版、pp87〜101(一五)、二〇〇四年一月五日

◇相田満「和漢古典学のオントロジの資源化のために―『国書総目録』の分類について―」

『東アジアの出版文化』G班ニューズレター』九、二〇〇五年三月(予

定)

《三》研究第三年度(平成十六年度)の研究組織

【研究代表者】

相田満(国文学研究資料館・研究情報部助手)

【研究分担者】

安保博史(群馬県立女子大学・文学部助教)

入口敦志(国文学研究資料館・研究情報部助手)

長崎健(中央大学・文学部教授)

山田直子(国文学研究資料館・整理閲覧部助手)

渡辺信和(同朋学園・仏教文化研究所研究室長)

【研究協力者】

坏美奈子(日本大学・非常勤講師)

江戸英雄(国文学研究資料館・研究情報部助手)

蔵中しのぶ(大東文化大学・外国語学部教授)

後藤幸良(相模女子大学・短期大学部)

佐伯雅子(人間総合科学大学・人間科学部助教)

谷本玲大(相模女子大学・非常勤講師)

中島和歌子(北海道教育大学・社会言語教育系助教)

枅尾武(成城大学・文学部・教授)

原正一郎(国文学研究資料館・研究情報部助教)

【研究補助】

根木優(成城大学・大学院生)

《四》 研究課題

【研究課題名】和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究

The Fundamental Research about "The literature act of a title" which is visible to the Classic Books of Japan and China

【研究種目】萌芽研究

【研究領域】文学(国文学)〔領域番号二四二〕

【研究期間】二〇〇二年度(平成一四年度)～二〇〇四年度(平成一六年度)

【課題番号】一四六五一〇七八

【二〇〇二年度研究費】一三〇万円

【二〇〇三年度研究費】一一〇万円

【二〇〇四年度研究費】六〇万円

《五》 研究目的

〔一〕本研究の研究目的平成十四年度 萌芽研究
研究計画圖書(新規)より

(一)萌芽研究で申請する理由

本研究は、「作品表題」(Title)や「目次標題」(contents)などの、およそ知的成果物に不可欠な「標題」の意匠について、和漢古典籍を対象に、分析・分類作業を試みるものである。

分析対象を古典籍に限定する理由は、「標題」の意匠に関する評価言説が多数取材可能なこと、「標題」自体が独立した作品も通行していたことなど、文化的継承性・表現技術・評価言説の諸点で、現代の作品以上に多様な典型的事例が期待されるからである。

そもそも「標題」には、作品世界の論理が凝縮されるだけでなく、その枠に収まり切れぬ言語遊戯的興趣も確認される。とりわけ、「目次標題」には、日本独自の文芸形態である連句・連歌にも通底する連纂の技法もうかがえ、流派・門閥とは全く無縁で自由な表現世界ではありながら、きわめて濃厚な文化的継承性が現れている。

しかし、このように特異な文芸現象に着目する先行研究が皆無なのは、従来の「近代的」価値観の枠組みに囚われすぎ、多様な資料群を横断的・マクロ的に捕らえる視点の欠如によるものではあるまいか。

そこで、上述の観点による分析を試み、「標題」に潜む「文芸」性の定立を求めたい。

(二)研究の背景(着想に至った経緯等)

申請代表者は、二十年来『蒙求』の体裁に倣った標題揭示型類書の収集と分析に取り組んで来た。(「蒙求型人物故事類書の書承に見る日本文学への影響に関する研究」H7奨励研究(A)、代表：相田満)他)。さらに数年来、申請者を中心に和漢古典の知識型類聚編纂物の分類概念項目語彙(概念木Ⅱオントロジ)の収集と分析作業を行ってきた(「和漢古典分類語彙の階層化に関する基礎的研究」H10萌芽的研究、代表：相田満)。

これらの研究を発展的に継続させる中で、「作品標題」における一字一句の語義と継承性、「目次標題」引用・パロディ、定型句化、押韻などの言語遊戯が、かかる「標題」に散りばめられた作品が頭著に認められ、配列の妙と相俟って、かかる行為に対する賞賛的言辭や批評的言説も産み出されてもいることから、「標題文芸」なるコンセプトの基に体系化を試みる必要を痛感するに至り、ここに新たなプロジェクトを企画した次第である。

(三)研究目的

本研究では、「作品標題」と「目次・評語標題」の分析の二系統で分析作業を進めたい。

まず、「作品標題」の分析作業では、国書総目録や中国典籍国書の古典籍に関する書名の電子化データを使用して、書名に使用される文字・語句の頻度分析結果を抽出。これを基礎として、継承関係の大綱と、詳細な文化的影響関係を求める。

次に「目次標題」については、典型的事例の抽出と分析作業により、その意匠の分類と、評価言説の分類を中心に進める。なお、これらの中には詩歌の文芸創作行為と密接に関わるものも少なくないことから、かかる文芸作品から標題が抽出・配列されるに至る一連の文芸行為の過程をモデル化して示すことにも取り組みたい。

(四)当該分野におけるこの研究(計画)の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

「標題文芸」という観点から、その配列規則と字義の継承性を総括的・系統的に分析する試みには、未だ先例がない。そこで、本研究で開発される研究方法と、基礎データは、広く公開に供することを予定している。このことにより、文学はもとより図書館情報学、認知科学、知識工学など、さまざまな面で有益な成果が提供できると予想する。なかでも、情報処理と文学教育との融合的教育プログラムの観点においては、格好の演習教材となろう。

(五)国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ

書名そのものの継承性に関する研究で体系的なものは存在せず、作品内における連纂手法に着目する研究は、俳諧・連歌を除けば、『古今和歌集』や『今昔物語集』に関する研究を嚆矢とする和歌・説話文学研究に見受けられる程度である。また、「目次標題」を独立させた作品については、従来教訓の一

環として扱われ、内容に踏み込んだ論究はなかった。

しかし、これらの研究も、本研究で予定されるごとく、言語文化の総体の枠組みの中で、系統的に位置づけられるべきであろう。本研究は、その意味でも、活発な議論の土台となることが期待される。

〔二〕平成十四年度の研究実績の概要

平成十四年度科学研究費補助金研究実績報告書より

研究初年度は7回の研究協議を持ち、研究の進め方についてのほか、それぞれの研究分野における「標題」の問題点・意義などについて各分担者および研究協力者による報告・協議を重ねた。

また、その成果の一端は、本研究の中間報告書を兼ねる「標題文芸」という冊子にまとめられた。これは、全て書き下ろしの論文で構成されているもので、大別して作品標題と目次標題の分析を主題にすえ、それぞれについて典型例の抽出作業と考察がなされた。

まず、作品標題については、近世仮名草子と戯曲、俳書、御伽草子それぞれの書名標題についての考察が行われ、奇数字数尊重の傾向の統計的実態調査(入口)、俳書の標題に見る文芸ジャンルのステイタスの問題(安保)、書名の命名原理を分析するために御伽草子を素材とした網羅的分析(渡辺)が試みられ、それぞれ報告がまとめられた。

目次標題については、類聚編纂物における部類のための見出し(部類標題)の継承性についての考察を試み、近年情報学で注目を浴びているオントロジ(知識概念木)の資源としての可能性についてふれた(相田)。

なお、本研究主題は和漢古典籍における「標題」を主要な素材とするが、その先行研究はない。しかし、「名前」「命名」などの原理をめぐって音楽・美術さらには、登録商標など、古典時代から現代生活に至るまで、無視出来ない諸

現象が、考察が断片的ながら存在することが研究を進めるにつれて判明してきた。そこで、その一端についてもまとめて報告したが、(相田)「標題」というものの生成原理や価値を考察するために、比較対象となるべきさまざまな脱領域的素材・研究の調査・分析も不可欠なことが明らかになってきた。今後それらの課題の消化を試みることによっても研究の深化をはかつていく。

〔三〕平成十五年度の研究実績の概要〔平成十五年度科学研究費補助金研究実績報告書より〕

研究第二年度は、標記研究分担者のほかに十二名の研究協力者を得て、前年度の分析が及ばなかった分野・作品における「標題」の問題点・意義などについて、三回の研究会を開催し、研究報告と協議を行った。それぞれの研究会は、いずれも所定の時間設定だけでは物足りないほどの充実した内容となり、その成果の一端は、前年度と同様に本研究の中間報告書を兼ねた『標題文芸(式)』という冊子にまとめた。

その報告書に収載した今年度の研究の内容(主題)は、以下の通りである。

① 目次・目録標題について
仮名草子を対象として(入口敦志)

説話集を対象として(渡辺信和)

② 書名標題について

俳諧紀行文の書名について(安保博史)

③ 「標題」についての総合的研究

「標題」の総合的研究、現代の「標題」、独立型標題文芸作品の影響分析(相田)

また、研究会以外の場においても、相田が随心院蔵の『百八字形』という独立型標題(標題だけが作品として独立したもの)の作品についての翻刻と分析

を行った。さらに、情報学的観点から標題を分析する手法の確立のために、『千字文』を素材として採り上げ、『千字文』中の全異体字を包含した分析用データを作成、日本における『千字文』の影響を『風土記』中に使用される漢字と比較し、出現頻度の分析を行い、各『風土記』間に最大100%程度の頻度差があるという結果を得た。

研究が進むにつれ、分析対象となる個々の作品研究に関する、従前と全く異なる視野からのアプローチによつての、文学研究の深化が確認できるだけでなく、「標題」自体の意義・意味について

相対的かつ幅広い視野からの分析の必要性も痛感しつつある。その意味で、本研究主題は「標題学」ともいうべき広がりを見せはじめてもいるが、本研究に対する反響も届きはじめており、助成研究の最終年度となる翌年度は、さらなる発展的な視点も踏まえた研究を進めたい。